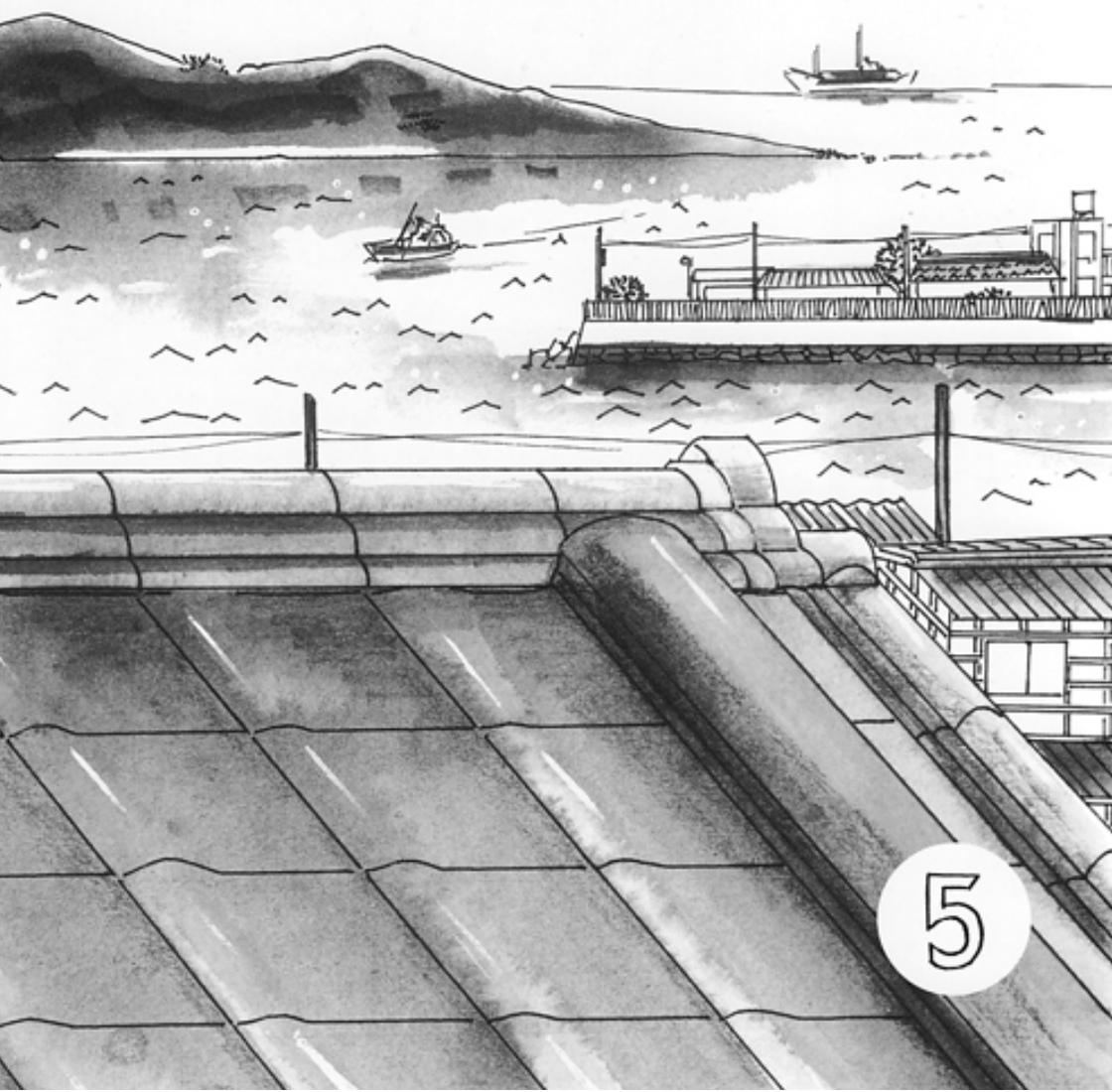


令和2年5月5日発行(毎月5日1回発行)
第60巻5月号(通巻730号)

風土



5

まぼろしの清々軒と竹牀几

この句には「わが生家、床屋跡」の前書があります。桂郎師は明治四十二年、東京の三田の理髪店「清々軒」で生まれました。成長して理髪師として店を継ぎますが、昭和十五年に廃業し、小説家、俳人としての人生を歩みます。昭和二十年の空襲で焼け出され、生家の「清々軒」は跡形もなくなります。久しぶりに「まぼろしの清々軒」に佇んだ桂郎師には、在りし日の「清々軒」と「竹牀几」に憩う客たちがありありと見えるのです。

文机やで虫のいつ紛れぬし

この「文机」は書齋兼住居の七畳小屋のものです。七畳小屋は竹藪に囲まれています。梅雨ともなると板戸の隙間から湿気が容赦なく入り、小屋に充満するのです。べつとりと冷たい畳に座り、仕事を始めようとすると、「でで虫」が角を出しているではありませんか。思わぬ闖入者に苦笑いの桂郎師が見えます。

涼風のいつ離れてげんの墓

この句には「げんは蕪村の母」の註釈があります。「げんの墓」は京都の丹後は与謝野町加悦にあります。げんは大阪の商家に嫁ぎ、蕪村を生みますが、その後離縁され不遇な生涯を閉じたと言われています。「げんの墓」は生家の屋敷畑の隅にひっそりと建っています。「いつ離れて」が、げんの生涯を象徴しています。ちなみに蕪村は加悦を何度も訪れ母の面影を追っています。

人形座背景の竹皮を脱ぐ

この句には「一滴文庫」の前書があります。「一滴文庫」は作家の水戸勉が、故郷の若狭大飯町に建てたものです。貧乏で本が読めなかった幼少時の体験から、自らの蔵書を少年少女のために開放しようと建てたものです。また竹の和紙の工房を作り、竹和紙の人形一座も立ち上げました。「一滴文庫」を訪れた器師は、人形劇の舞台の後ろがそのまま竹林になっているのに驚きました。その竹たちがいままさに皮を脱ぐようとしているのです。

父祖の山

南うみを

鳶かもめ飛び交ふ若狭ひなめぐり
松籟にひひなは遠目したまへる
魚の糶覗くも若狭ひなめぐり
雨ながら雲の明るきひひなの忌
夕風にゆるりゆらりと吊し雛

ぶつぶつとやがて騒然夜のひひな
芽起しのこゑのぼりゆく父祖の山
下萌や鋤に楔の新しく
初蝶にいきなり天地返しの鋤
田螺和楊枝につつき昼を酔ふ
なぞへ畑ころがる芋を植ゑにけり
かげろふの深きをいまも父の鋤

〔ウエップ俳句通信〕百十五号作品と一部重複



竹間集

同人作品



春なれや

鈴木 石花

寒明けのカーテンコール演奏会
春なれや薄化粧して三越へ
追憶の提灯行列紀元節
山頂の貴船様混む午祭
待ち合はす茶房の暗がりうかれ猫
常連のをとこ茶房に子猫愛づ
引継ぎてははの育てし君紫蘭

梅 二月

門伝 史会

梅二月うがひ手洗ひ念入りに
箒目の砂紋にひそむ余寒かな
建国日神話の国の神楽舞ふ
仕切りなき空の自由に春の雲
母の世の雛と棲み古り終の家
風光る水飲む小鳥首あげて
囀や野はふくれゆくものばかり

さくら鯛

山田 暢子

草の芽の地上を覗くごと生える
木々芽吹く地球の風に触れたくて
沈丁の香に佇めば呼ばれたる
春一番ゆるぎなき意思ありにけり
活け変へて今日もすこやか桃の花
合格の報せ待たるる静かな日
海原の果ても海原さくら鯛

立 春

岩木 茂

立春の日を全開の孔雀かな
海門の風の満ち引き若布干す
結界を溢れ出したる追雛の火
竹秋の道ゆく父の忌なりけり
梅が香に手繰り寄せたる父のこゑ
街道の日射しが跨ぐ雛の家
自然数の始まりは一はぐれ鴨

白牡丹

田村すゝむ

老いの春つくづく辿る生命線
大夕立大仏様を水洗ひ
座禅草生死思はぬ日はありぬ
桜咲く人生百年真只中
春愁ひと筋光秀鬣かな
死の事を思はぬ日なし白牡丹
四月来る位置付けと決めて椅子机

春遅々と

小林 輝子

杖の夫出づれば寄り来寒鴉
雨も風も雪も雪解を急かしけり
雪積る櫛を葺ひし翌朝に
春めくや星の浮かべるに潦
雪見えぬ位置に高砂雛飾る
櫛を腰に雪代岩魚釣る
よく食べてよく寝て食べて春遅々と

雛の日

田中佐知子

竜の玉武骨の指が捉へけり
蜷の道放生池を出でにけり
螺旋なすはふりの煙春疾風
追雛会の巫女の寒紅あやしかり
禅の門三つくぐりて春立ちぬ
親王雛当主に似たる面輪にて
雛の日や夫に添ひ来し五十年

流水来

中村 洋子

風紋を花のかたちに流水来
海へ押し分けてゆきたる雪解川
猫通る谷中寺町梅ふふむ
手触りの絹のやはらか木の芽かな
まんさくのちりちりちりと咲き始む
春の山丸く切り取る道路鏡
桜鯛鳴門の渦を飛び跳ぬる

芽木の風

橋添やよひ

芽木の風ぶつかるもあり猿が辻
御溝おかわみず水流れゆるやか日脚伸ぶ
象啼いて岡崎の春呼び覚ます
百獣の王檻に老い冬ぬくし
節分や笹の袋の青海波
楽茶碗遺品となるや冴え返る
春の風邪ふるさと駈けし夢の覚め

鳥帰る

浅田 光代

芽柳や白雲を梳き風を梳き
下萌に伏せてスコップ猫車
春寒やなにも映さぬ水たまり
紅梅にばつと心のひらくなり
校庭の直線曲線鳥帰る
木々芽吹く鳥水平にすいへいに
歯ざはりのしやきと水菜の芥子和

波の泡

浜 福恵

父の忌の辛子を利かす菜花和へ
真珠母貝を沈めて海に春の黙
春はすぐそこ渚に残る波の泡
遠足や木橋の揺るる村を過ぎ
芝草の足裏にやさし城の春
初蛙瑠璃光如来の御前に
先ずは立ち上るが試歩ぞ魚は水に
注：題に「あまのついで」を添えて「あまのついで」を添えて「あまのついで」

山河集

同人作品



南うみを選

里神楽大蛇が肩で息をする
下萌やくろぐる光る土竜塚
春浅し千代紙人形香のほのと
桜鯛婚の使ひに老師くる
桃缶のひとさじ母へ春の風邪

森田 節子

犬ふぐり躑めば影も躑みけり
碁敵と劫を争ふ日永かな
古書店に『のらくろ』求む遅日かな
春昼や動かぬものに犀の背
なまけもの枝撓まする日永かな

竹生田勝次

古雛髪こひなげの乱れも雅なる
はは愛あひでし白梅の幹罅あまた
恋猫の家出五泊ごぱくとなりけり

上村 葉子

末黒野の匂ひ幽き安房郡
吊るさるる鮫鱈さめだに兎の後じさり

石井美智子

ただならぬ声を交はして鳥帰る
鳥帰るひと群れの数夥し
雪形ゆきかたに作を占ふ日和かな
鳥の声枝から枝へ雪解溪
日を集め峡の川岸雪間草

佐野つたえ

空つ風の味干し芋に染み込みぬ
ぐんぐんと伸びる明日葉摘む朝
老い親に歩を合はし行く春の昼
春夕焼五時の童謡風わらわに聞く
たんぽぽの日毎黄の増す斜面かな

実朝忌

内藤 静

走り湯のけむりを薙ぎて風寒し
きざはしの上は権現実朝忌
をさな名を千幡となむ竜の玉
霞立つ奥の墓所より見渡せば
母と子とやぐら相似て囀れり
鎌倉や五山いづれも紅椿
陽炎へる古き館のレストラン
実朝もかくや春日の窓辺の子

すみれ散らして前菜の心意気
開かんと辛夷はこぶし打ちあひぬ
この谷やっに出土せしもの梅白し
一門のなだれ斃れし露の臺
政子岩になびく白旗柳の芽
海鳴や銀杏たかだか蘂ゆる
波音や鳶の羽音や松の芯
春濤のおのれ捲きては抛てる
春濤の岩をみがきて去り行くも
なぎさ漕ぐ小舟のやがて朧かな
畑中秦野のみしるし塚や蝶の昼
春光へけけれあれとぞ祈り継ぐ

実朝に「たまくしげ箱根のみうみけれあれや二国かけてなにかたゆたふ」の歌あれば

風土独語／南 うみを



里神楽大蛇が肩で息をする 森田 節子

この里神楽は、「大蛇」が出ることから出雲系のおろち退治の神楽でしょう。素戔鳴尊との見せ場を終えた「大蛇」が、大きく肩で息をしています。臨場感があります。

梅が香に先立ってゆく弓袋 赤石 梨花

「梅が香」と「弓袋」の取り合わせから、神社の境内にある弓道場を想像します。白梅の清楚な香りの中を、弓袋の幾人かが道場へ向かっています。玉砂利を踏む音だけが聞こえてきます。

春昼や動かぬものに犀の背ナ 竹生田勝次

犀はいったん動きを止めたら微動だにしません。春の真昼、犀のまわりだけ時間が止まってしまいました。それを「背ナ」に焦点を当て、クローズアップしました。

薄氷やタイルまばらな外ながし 岡本 尚子

一昔前は庭に「外ながし」があり、土ものなど洗い流したものでした。今やそのタイルも剥がれ、そこに「薄氷」ができています。作者はつくづくと時の流れを感じています。

吊るさるる鮫鱈に児の後じさり 上村 葉子

深海魚の鮫鱈の姿はグロテスクです。それが魚屋の店先に吊るされています。そのぬめりとした異形に幼子は思はず「後じさり」したのです。児のおっかなびつくりの顔が見えます。

実朝忌海へ出る道まつすぐに 仙田 孝子

実朝と言えば「大海の磯もどころに寄る浪われてくだけてさけてちるかも」の歌を想い起します。「海へ出る道まつすぐに」が実朝のおおらかで率直な歌心と重なります。

ただならぬ声を交はして鳥帰る 石井美智子

この句は、鳥たちが北へ帰る時の声は普段と違うのだと言うことを伝えています。遠くシベリアまで帰るのです。励まし合うような覚悟の声を「ただならぬ声」と捉えました。

そはそはとかほをならべて露の臺 雨宮 桂子

この句は、早春の世界に先駆けて現れてくる「露の臺」を擬人化しました。「そはそはとかほをならべて」が、冷たい風に落ち着かない様子を伝えています。ひらがな表記が巧みです。

空つ風の味干し芋に染み込みぬ 佐野つたえ

作者は上州名物の「空つ風」に干した芋が旨いのは、その味が染みているからだと言っています。風に味はありませんが、その旨味は「空つ風」が加えたものなのです。

風土集



南うみを選

立春や昇りゆく日に權の音 横浜 赤石 梨花

梅が香に先立ってゆく弓袋

梅林へ大踏切の人さばく

巻尺のするする戻り下萌ゆる

茂吉忌はわが生れし日と空へ告ぐ

薄氷やタイルまばらな外ながし 相模原 岡本 尚子

古書店の奥にあるじと春火鉢

CDにB面は無し春の風邪

余寒なほ秒針胸に銜して

鷺一羽降り立つ沢の落椿 川崎 仙田 孝子

居候にも言ひ分のあり牡丹の芽

臥竜梅野点の席の緋毛氈

実朝忌海へ出る道まつすぐに

寺カフエの庵へ坂道路の臺

三極の花少年の口重たし 福生 雨宮 桂子

鬼やらひ虫歯の鬼のとびまはる

そはそはとかほをならべて露の臺

思ひきり影をのぼして二月尽

春の雲とんで東京環状線

雲割つて空顯るる露の臺 上尾 根岸 善仁

駅を出る散り散りの背の冴返る

花挿さぬ花瓶の光る二月かな

如月や啼ける小鳥の喉仏

うすらひや雲のゑくぼに田のゑくぼ

早春の山下りてくる泥の靴 舞鶴 小原芙美子

仔羊もいばる音させ春動く

遊糸のみづうみの端踏んでゆく

山びこに遠足の列後れゆく

やはらかき早梅の影踏み歩く